

与論島『もうひとつの按司根津栄伝説』

前田達朗

はじめに

与論島で文化庁の支援を受けた事業として2017年11月25日の公演を目指して、8月から準備・稽古が本格化した。スーパーエキセントリックシアター(SET)から脚本家と演出家を招き、島民をキャストに、与論島に伝わる「アジニッチェ」の伝説を下敷きに坂田鉄平によって書き下ろされたのが『もうひとつの按司根津栄伝説』である。この初めての試みが地域社会でどのように受け止められたかについては時間をおく必要もあるかと思うが、公演当日を挟んで現地で調査を行ったものの報告である。

「方言劇」の概要

4月から島内で始まった公募に応募した与論島住民が出演し、与論島在住のミュージシャン川畑アキラが音楽を担当した⁴⁰。9月から稽古が本格化した。それ以前から住民による準備は始まっていた。キャストがなかなか確定しなかったのが準備段階での一番の課題であった。⁴¹2017年11月24日に「与論町文化祭」のメインイベントとして上演された。劇は2幕10場、上演時間約60分であった。戯曲のモチーフになったのは13世紀北山王朝に与論が侵略された際、琉球北山軍の上陸を阻んだ英雄「アジニッチェ」の伝説である。いまも彼を祀る「神社」が存在し、彼の「遺骨」とされるものも伝承されており、与論島の住民・出身者（以下島民とする）にとってはなじみのある物語である。その時代に現代の与論島の高校生と教師がタイムスリップし、島民たちと交流し生活を共にし、アジニッチェの琉球軍との戦いに参加、琉球軍が攻め込み与論島民が殲滅されようとするその時、アジニッチェは戦死し若者たちはそのタイミングで現代に戻るというストーリーである。SEなどのエンジニアやプロの役者も沖縄から参加、SETのメンバーが不在の間は彼らが指導にあたっていた。

「方言」の役割

劇中では現代の若者は東京語の若者言葉、800年前の与論島民は与論語（ゆんぬふうとうば）、琉球人は時代がかったスタイルの日本語に設定されていた。ここでは演者を含む島民の呼称にならって「方言」と呼ぶことにする。脚本家坂田鉄平へのインタビューによると、若者には現行の方言を話させるアイデアもあったが、昔の島民の話すことばとの対比を鮮やかにするため「共通語」を使った。また琉球軍や北山王に日本語を話させることの問題にももちろん気づいていたが、琉球語を話させるのは難しく演出効果を優先させた。従って現代の日本語、昔の与論語という対比は配役や脚本の中で大きな柱となる。島民の言葉がわからない若者は「ひいおじいちゃんがしゃべってた言葉に似ている」という。自分たちが現代にいないことを理解させる大きな手がかりが言葉である。中年の教師は時間を経て彼らの言葉を理解するようになり若者との通訳の役割を果たすようになる。そうし

⁴⁰ 川畑の個人ブログに経緯は詳しい。<https://ameblo.jp/akiramanspring/entry-12306618899.html>

⁴¹ 制作側、地元住民側双方がこの点については共有していた。

て若者たちは島民のことばを理解するようになり非対称バイリンガルになっていく。これらの事象は与論島民にとっては受け容れやすいものなのであろう。

台詞の中での棲み分けは、配役と当日の観衆の反応にも投影された。すなわちかつての島民役はほぼ40代以上の島民が演じ、若者役は当然ながら20代以下の若者が演じるのだが、「方言」の台詞に笑うのも中年層以上の観衆であった。調査としては十分でなく詳細は別稿に譲るが、琉球語域の中でも与論は話者の年齢が比較的若く、しかも日常的に使われていると見えた。それゆえ「わかる」「わからない」の違いも鮮やかであった。また移住者の割合も高いと島民は考えており、「若者」「中年以上」「移住者」をわけるメルクマールに与論語はなり得るとも考えられているようだ。成人したアジニッチェを演じた人は与論語話者ではないが、台詞としてあたえられるうちに「わかるようになった」とのコメントがあった。

制作側へのインタビュー

演出家の白土直子氏はこれまでも同様の経験、プロの役者ではない人々に演技指導をして劇を作り上げるというものを何度か経てきた。従って与論でのこともそれほど特別ではなかったとのことである。時間の感覚の違い、キャストの集まり、練習が始まってからの個々人の気持ちの入り方の違いなどがあげられたが、受け入れられてからはスムーズにいき、彼女の話す「標準語」でもコミュニケーションに齟齬はなかったと感じていた。

脚本家の坂田鉄平氏の劇中での言語の設定については既述したが、地元の人々と話し合っただけで脚本を練り上げたと考えている。特に翻訳の作業が入るため通常の作業より多くの労力を要した。「方言劇」という設定のため予想はしていたが、ことばの「距離」は想像以上であったという。事情が許せば継続して取り組みたいという。

短い時間であったこと、本番の前後であったことなどを考え合わせると、彼らのコメントの中に課題を見つけることは難しいため、今後も継続的な調査が必要であらう。

演者へのインタビュー

既述のようにキャストは一名の沖縄からのプロの役者をのぞき全て与論島在住者であった。これは文化庁事業の当初の目的のひとつでもあったのだが、「演劇」そのものに未経験の人々（学芸会に出た、のようなものはもちろん除いて）が劇を作り上げるというかなり非日常的な経験に興奮があったことをまず断っておかなければならない。今回の劇の「でき」は本稿の目的ではないが、素人目には相当の完成度であったと考えている。前節でのべたように本番直後のインタビューであるために総括や批判的な分析は難しいと考えるからだ。従って話題は劇そのものよりも自身のあるいは同世代の、与論全体を見通した言語状況の話に及ぶことが多かった。インタビューは構造化することなく2名⁴²での調査であったが展開はそれぞれがその場ですすめた。「今回の劇が『方言』の状況にどのように影響するか?」「自身の今後の言語生活にどのような影響があるか?」「若い世代の言語継承について」は全員に聞くことだけを設定した。およそ30名に及んだ出演者のうち6名に話を聞くことができた。以下それらの抄訳である。

⁴² 「演劇」の調査は石原昌英氏と前田が担当した。

- ① 準主役女性 1965 年生まれ;高校卒業後内地で就職。名古屋圏、東京圏で主に生活し、2014 年頃に帰郷。自分の年代では「方言」は個人差はあれ普通に通じるという認識がある。長く島を離れていたが「方言」使用に不自由はない。今回の劇での配役も小柄で若く見えるということ(娘役)とことばができるということだと考えられる。帰島後、幼稚園・保育園で勤務したが、島の言葉を使わせることに現場では積極的だった。だが個人や施設により差はあると感じている。演技をする経験は初めてだが自分は楽しめた。自身の子ども(20代)を含め、特に島を離れた若い世代は「方言」の能力は「低い」と感じている。与論は40代でも方言を使うがそれ以下の世代との差が激しい。
- ② 若者役男性 1991 年生まれ;高校卒業後関東地方の大学に進学、大学院で民俗学を専門とする。帰島語は家業に従事。3世代同居のため、祖母や父母からしまことばは日常的に習得した。しかし父親が「しなければならぬ」方針だったため反発も感じていた。今でも「しまことば」を父親の前で話すのが抵抗ある。「間違え」と訂正されるから窮屈に感じるからだ。父親だけでなく上の世代の前で話すことには抵抗が劇では日本語だけを話す役だったので正直ほっとした。島で仕事をしている若者、特に男性には与論語が必要だと考えている。
- ③ 高校生役高校生(男女二人)高校2年生。中学時代からの友人。男子の方は演劇部で、募集の時に女子を誘った。「方言劇」という募集は他の人には敷居が高かったと思う。男子は移住者の子ども。父母とも関東出身だが父親は島の言葉を使える。現業系の仕事には不可欠だと思う。与論は好きだが大学に進学したいため島を離れることを考えている。女子は島の「窮屈さ」を感じている。しまのことばは、中年以上の男性が使うものだと考えているが、少しだけ興味が出た。ただ今のところできるようになるとは思えない。この劇の効果もわからない。
- ④ 教師役教師 1965 年生まれ;薩摩地方出身。2年前に赴任。与論の文化と国語教師として「方言」にも興味がある。島民ではないが今回「方言」を話す役まわりだったことに「少し」考えたがやってよかったと思う。任期は残り少しだと思うができるだけ「勉強」したいと考えている。少し「方言」がわかるよになって島の人たちとよりわかりあえるようになったと感じている。
- ⑤ 与論語指導・翻訳・長老役 「ゆんぬふうとうば」継承・普及に長年関わってきた人物。今回の劇の制作にも最初期から関わった。この企画の効果と継続に期待をしている。ただ劇のための練習となってしまうと「目的」から外れると考えている。

演者の共通の感想としては「劇は成功でありよい経験をした」ということであつたが、このことをのぞくと、世代間の言語能力の差があるという言説が共有されていることであると言えよう。配役の部分でも触れたが普及・継承を目的とするのであれば「話させる」というアプローチも考えられたはずだが作り込む中で長い台詞は非母語話者には難しいという議論もあつたそうである。限られた時間、「素人」に演技をさせるという難しさなどを考えると理解できるのだが、劇としての完成度が優先された感はある。

この世代間の「分断」の原因を探るにはあまりにも不十分なため推測もさけるが、ヒントとなるものは「男性は話せるようになる・必要である」というコメントであろう。脚本の設定からして当然であるが、こうした与論の言語状況を今回については「追認」ということしかできなかったというのが調査を通じて得た印象である。またこれは与論に限

定されたことではない「年上のひとのまえでは話しにくい」という若い世代の感覚が現れたことも制作過程で影響があったかも知れない。今後の調査で確認したい。

さらにインタビューという形ではなかったが演者の中から「長時間・長期間の稽古の負担」を訴える声が複数あった。なかなかキャストが集まらない・決まらない中で特定の人間関係を伝に「断れない」人がいたことも間違いはない。どのように参加者を募っていくか、モチベーションをどこにおくかが問題になろう。特定の個人の負担への依存がここにも見られたのである。

結語 演劇と言語継承

伝統芸能としての諸鈍シバヤと初めての与論での現代演劇の試みを並べ論ずることに意義を見いだすとすれば、それは継続する可能性を考えることであろう。与論の「方言劇」を続けるとすれば、ということになるだけでなく、伝承の困難さが増したと言われている諸鈍シバヤが続くための課題と共通するところがあると考えからだ。まずシバヤで見て取れた個人の犠牲や個人へ依存する体質、体制が与論でも早くも見えた。具体的には「できる人」がより負担が集中する状況である。島のコミュニティの濃密さが素地にあるのは間違いなく、どのような行事にも共通することではあるが、推進力であるのと同時にその個人に何かあったときのバックアップが考えにくい。またこの年長者や実力者を上位とするある種の階層性はその下位に置かれるもの、とくに若年者の参加をためらわせるものになっていることも見て取れる。このバランスをどこで取るかは外部のものからはコミットしにくい部分であるが、たとえば与論でも「よそ者」の存在や役割が大きかったことも一つの示唆であろう。また与論の場合は沖縄と近いことが様々な面で利点となっていたように思う。また演劇「だけ」では言語継承に効果がないことは諸鈍シバヤが地域のシマグチ教室と連動しなくなったこと、イベントのための練習になってしまったことからわかる。⁴³

また時間を経た諸鈍シバヤと新しい試みの大きな違いは「現地化」できていることだろう。諸鈍が頑なに諸鈍のものとして守ってきたシバヤを後継者不足の面では足かせであるかのようにも書いたが、一方で保存会を中心としたメンバーだけで上演ができる体制がある。今回のような試みは与論島住民だけでは続けることは現状では難しいと思われる。しかし「方言」に関わるものは古いもの、というイメージを覆すためには「新作」が必要である。「伝統」だけを追い求めて行くことは言語そのものの活力を奪うことになる。そういう意味では与論の試みは一過性のものに終わらなければ言語伝承の機会となり得ると考える。

その際になにが必要か、ということをごとこで論じるのは難しいが、たとえば今回の劇の設定にもあったような「『方言』はふるいもの、年寄りのもの」といった前提を若者に「方言」を使わせるような役どころを積極的に配置していく必要があると思われる。伝承の機会となる可能性がある一方で「分断」を加速させることもあり得ると考える。

言語継承は言語だけの継承では維持できないことは間違いはない。自分たちの文化やアイデンティティの継承であることも間違いはない。その「場」としての演劇の可能性は三つの事例に見て取れたと考える。またいずれの事例も今後の推移を見守る必要がある。

⁴³ 石原の沖縄 Hands-On の項に詳しい